# カゲロウデイズ もう一つの夏の日々

劉騎913

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本来あるはずの無い少年少女の夏が始まる……

カゲプロと仮面ライダー５５５のクロスオーバーです

アニメだけの知識なので至らぬ点が多々ありますので、設定がだいぶ違いますがご容赦お願いいたします。

# 目次


始まりの8月15日 1
始まりの8月15日【2】 3
始まりの8月15日【3】 6
始まりの8月15日【4】 9
始まりの8月15日【5】 13
始まりの8月15日【6】 16
始まりの8月15日【7】 21
始まりの8月15日【8】 25
存在しない16日の日々
存在しない16日 29
存在しない16日 32
存在しない16日 36
呼び出された17日の怪奇
呼び出された17日 40
呼び出された17日 44
呼び出された17日 47
呼び出された17日 51
呼び出された17日 54
呼び出された17日 58
諸事情によりまだ途中です 63

# 始まりの８月１５日

この世界は君たちの知っている世界じゃない。あるべきものが無かったり、本来、無いものがあったりする。だけど、世界が理不尽なのは変わりない。その中でどう抗い、どう切り抜け答えを導くか楽しみだよ……

……如月伸太郎君……

シンタローｓｉｄｅ

今日は厄日だ……二年ぶりに外に出てみれば、女性店員困らせるしテロに巻き込まれるし、気絶してるうちに何か訳のわからないフード集団に拉致られて、何かモモがその中に居るし、勝手に話聞かされて入団させられるわ。

本当に何なんだ……まさか？今までの全部お芝居で、俺のニート生活を終わらせる気か？って……んなわけあるはずがない…俺の社会進出にそこまでする価値なんて無いだろうし考えすぎだな。

時計を見ると時間は七時になっていて、あのメカなんとか団から解放されて、この公園のベンチで四時間は過ごしていた。そろそろ腹も減ったし、家に帰るか。キーボードは結局買えなかったし、また明日外に出るのか……やだなぁ…外出たくないなぁ……

明日外に出ることに対して苦悩していると、スマホに挿したイヤホ

ンから甲高い声が、俺の左耳を殺しにかかる。
「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ??」
「うわぁ？何だよ？いきなり？」
「やっと気づきましたか～ご主人。さっきから呼んでるのに何で気づかなかったんですか～？」
「考え事してたんだよ……」
「どうせ外出たくないなぁとかその辺ですよね？」
「うぐっ？…まぁそれはいいとして……あいつらには絶対に関わらないからな？」
「えぇ？明日の遊園地の件はどうするんですか⁉」
「知らん？明日はキーボードを買うだけだ？」
「えぇ？つまんないですよ？」
「うるせぇ？俺は明日のためにも早く帰って寝る？深夜にがなりたてるなよ？」
「明日のためって……どれだけもやし何ですか～？」
「何とでも言え？」ダッダッダ
「ご主人？そんなに走ったら危な…ご主人??避けて？」
「んだよ？…えっ？」
　こんな偶然ってあるのか……？俺が走り出して建設中のビルの前を通ったタイミングで、鉄骨が落ちてくるなんて……距離的にも走れば間に合う、だけど、この時の俺は動けなかった。
　人が林檎をかじり咀嚼し、果汁を啜り舌で味を感じ取り、脳はそれを初めて林檎と理解するように、俺は目に移った光景を理解する。だけど、もうその時にはもう間に合わなかった。鉄骨が俺の体の上に落下し、右腕が潰れた感触と体中が軋む痛みが俺を襲い、体から力が抜け俺は意識を失った。
　……ホントに厄日だ…せめてアヤノ以外の友達も欲しかった……

シンタローｓｉｄｅｏｕｔ

# 始まりの８月１５日【２】

キドｓｉｄｅ

あいつは大丈夫だろうか？やっぱり、あんな強引な感じで団に入れられたことに対して嫌がっているのでは無いだろうか？ここを立ち去る時、顔色が悪かったが俺達が原因かもしれない…とても心配だ……それに止めてしまうかもしれないし、謝りたい。

「キド、顔色悪いよ？大丈夫？」

「ん？あぁ？大丈夫だ。」

「どうせシンタロー君のこと考えてたんでしょ？俺達が原因でここを止めちゃうかもとか」

「ちっ違う？あいつがこの団の情報を漏らさないか心配なだけだ？」

何でバレたんだ…？あからさまに顔に出ていたのか？いや、そんなはずはない？無いはず……

「ホントにキドはカッコつけっすね～」

「うるさい？」

「だけど、僕も止めてほしくないな～彼、弄りやすいんだもん」

「何すかそれ、でも大丈夫じゃないすか？嫌なら断ってるだろうし」

「だろうね。彼、ちょっと楽しそうだったし」

「そ…そうか？…いや、あいつにはこの団に居てもらわなくては」

「嬉しい癖に照れちゃって～って痛ぁぁぁぁ？」

いつも通りからかってくるカノの脇腹に拳を一発打ち込む。

まったく懲りない奴だ。殴られるのが分かっているくせに、その減らず口を閉じる気配が無い。　こいつは本当に救いようがない……

「カノは本当に懲りないっすね～」

「カノ、いい加減にしなよ」

「痛いな～もうしないよ～マリーのポエムを読み上げる以外はね。確かマリーの机の二番目の棚の中に～」

「やぁぁぁめぇぇぇぇぇて？」

「あはっはっは？うぐっ？」

人の黒歴史を漁って楽しんでいる悪趣味なバカの溝内に裏拳を放つ。喰らってからしばらくして、またこいつはケラケラと笑い始める。こいつにはプライドが無いのか？何故、ここまで嫌がらせをするのに躊躇いが無いんだ。俺には理解しがたい…いや、理解したくない。

「カノ頭おかしい？」

「元からおかしいから気にしてるな」

「キド酷いよ～僕はいたって普通だよ」

「お前が普通なら世界はどうなる……ん？誰だ？」ゴゴゴゴ

突然、パーカーのポケットの中のスマホが俺チョイスの着信音をがなりたてる。

「何なんすか？その着信音」

「放っておけ。もしもし」

「もしもし？団長さん？お兄ちゃんそっちに行ってませんか⁉」

電話の主は三時間前に帰ったモモだった。かなり息が荒れている所から、そうとうマズい状況らしいな。シンタローの顔色も悪かったし心配だ。

「モモか？シンタローがどうした⁉」

「お兄ちゃん……あれから帰ってきてないんです？どこ探しても居なくて……エネちゃんとも連絡が取れなくて」

「わかった？俺達も探しに行く？」

「ありがとうございます？それじゃ？」プツン

シンタローが帰ってきてない…？あいつは昼下がりには帰ったはずだ。いなくなったとしたら、何かしろの事件に巻き込まれたのかもしれない？それにエネとも連絡が付かないのは怪しい…こんな所で新入団員と別れたくはない……

「シンタロー君がどうしたの？」

「わからないが行方を眩ましたらしい……」

「それって…」

「……何かに巻き込まれたのかも知れないっすね」

「そんな……」

「とにかく探しに行くぞ？」
「わかった？」
「マリー行くっすよ？」
「うん？」
シンタローの奴どこをほっつき歩いているんだ？このまま何もなければいいんだが……
無事で居ろよ？
キドｓｉｄｅｏｕｔ

# 始まりの８月１５日【３】

シンタローｓｉｄｅ

「うっ…痛？……くない。て言うか何で生きてるんだ…？俺」

あんな激痛だったのに、確かに体が潰れた感覚は嫌なほど感じたのに、何で傷ひとつ無いんだよ……？まさか、夢か？いや、鉄骨は本物だ。奇跡ってやつか？いや、体潰れたのに再生する奇跡ってなんだよ……あっ？エネなら何か知ってるんじゃ？

ポケットを漁ると、いつも一緒に居たスマホが真っ二つに割れて別れを告げていた。

さっきから静かだと思ったらこう言うことか……はぁ…これじゃあ連絡取れねぇじゃねぇか…とりあえず、明日機種変もするか。

俺が鉄骨の間から抜け出し、自宅に向かおうとしたその時、後ろから男の声がした。

「やあ、君がシンタロー君だね？」

「誰だ？あんた」

後ろを振り返ると、俺と同い年ぐらいの、右目に医療用の眼帯をした白いパーカー姿の男が立っていた。

この独特なファッションセンス、それに、この中二臭い雰囲気、凄くあいつらを連想させる。何で中二病の奴はパーカーが好きなんだ。

「僕の名前は遊佐優斗、ユサと呼んでくれ」

「単刀直入だけど、着いてきてくれないか？」

「何でだよ？俺は帰るんだ。放っておいてくれ」

「その壊れたスマホの代わり、それに引きこもるのに最高の環境をただであげると言ったら来るかい？」

「そんな上手い話「あるんだなこれが」はっ？」

「まぁ来たら解るよ」

スマホも引きこもる環境もただでくれる奴この世にいるのか？いや、いない、いなくて当然だ。そんな都合の良い話があるわけがない。だけど、何だ？こいつの目は、冗談を言っているように見えない。一

様着いていってみるか
「わかった。その代わりに話を詳しく聞かせろ」
「最初からそのつもりさ。さあ早く行こう」
俺はユサの後を親鳥に着いていくひよこのように、後ろを歩く。
その時、着くまで互いに一言も喋らなかった。これが無言の弾圧と言うやつなのか、夜の暗闇が更に圧迫してくる。
目的地に着いたためか、ユサは急に立ち止まる。その目の前には巨大なマンションが聳え立つ。
「着いた」
「ここってどう見ても高級マンションじゃねぇか…お前何者？」
「まぁ入ってから教えるよ」
マンションに入り、エレベーターで最上階の５０階に上がる。
エレベーターは騒音も無く、とてもスムーズに上がっていく。まるで何かの諜報組織の一員になった気分だ。
「ここが君の部屋になる場所さ」
「えっ⁉マジで⁉」
エレベーターを降りて一つだけある扉を開けると、俺の予想をはるかに超える物が目に飛び込んできた。
高級感のあるパソコンチェアにデスク、しかもパソコンは最新式の物だ。確か５０万はしたはずだぞ、あれ、それにパソコンデスクの横、ガラスの壁じゃねぇか。他のテーブルも大理石だし、ソファーもちゃんと用意されてる。
本当に何者なんだ？こいつは
「家賃とかは」
「別にいらない。ここは僕の父が管理しているマンションなんだ」
「どう言うことだ？それ？」
「まぁそれについては今から話すよ。とりあえず、座って話そう」
ユサはソファーに俺と対になるように座り、話を始める。
と言うか、その前にフード取れよ
「とりあえず、お前は何者だ？」
「僕は元スマートブレイン社社長、現１１ｔｈ社社長・遊佐文人の息

子」
スマートブレイン?あの大企業の元社長の息子?だから、こんなマンションをただで貸す余裕があるのか。
「後、君には伝えなくちゃいけないことがある」
「何だよ?」
ユサは少し黙り込み、フードと眼帯を外し話始める。
髪の毛が真っ白なのは良いとして、目が隻眼になってやがる……しかも、傷がかなり深い。

「僕は……僕と君は……」

「もう死んでいるんだ……」
シンタローｓｉｄｅｏｕｔ

# 始まりの８月１５日【４】

キドｓｉｄｅ

あれから一時間くらいは町の中を探したが、何処にもシンタローはいなかった。あいつの体つきからして、そんなに遠くへは行けないはずだ。それにエネと連絡が着かないのが不可解だ。まさか…誘拐されたんじゃ……

「あれ？団長さん、何でここに？」

「俺達もシンタローを探していたんだ」

「すいません……」

今のモモの表情は昼間の時とは真逆で、目に涙を浮かべていて、顔色も真っ青になっていた。あんなに皮肉を言っていても、やはり兄は兄、心配になるのは当然だな。

モモのためにも、早くシンタローを見つけないとな。それに、行方不明になった新入りを見つけられないなんて、団長としての示しが付かないからな。

「お前が何故謝る必要がある？お前に落ち度なんてない」

「それにあいつにはこの団の情報を話してしまったしな。必ず見つけるさ」

「団長さん…ありがとうございます」

「礼なんていらな……何だ？カノ」トントン

「ねぇキド、あれって…落ちてきたのかな？」

カノの指差す方向を見てみると、数本の鉄骨が落ちていた。

何故だろう……あの鉄骨から凄く嫌な予感がする。まるであの鉄骨が落下したことによって、誰かが死んだ……そんな気がしてならない。

「何すか……これ」

「どうした？…嘘……だろ」

セトが見ている鉄骨にびっしりと赤い液体のような物が付着していて、それからは鉄の臭いが嫌なほど漂っていた。

それとセトの手には千切れた白いイヤホンが握られていた。
「これってシンタローさんのイヤホンっすよね……？」
「確かにお兄ちゃん、そんなイヤホン着けてました。てことは……嘘」
「えっ……シンタロー死んじゃ「馬鹿なことを言うな？」えっ？」
「シンタローは死んでない？絶対に死んでない？」
「キド？落ちつい「これが落ち着いていられるか？」」
「あいつはまだ生きている？俺達が信じてやらなくてどうする」
あいつが生きているなんて根拠も確信もない。むしろ死んだ確率の方が高い。だけど、俺達が死んだと認めればシンタローは本当に死んだことになる。だから、俺達があいつの生存を信じてやるんだ。だから、全員顔を上げてくれ。でなければシンタローは……
「……そうですよね…まだお兄ちゃんは生きてます？お兄ちゃんがこんな所で死ぬわけがありません？」
「そうだね、まだ諦めるのは早い。また探そうよ」
「そうっすね。まだシンタローさんは生きてるッス？だからマリー、また一緒に探しに行くッスよ？」
「うん？」
その時、皆がシンタローが生きているという希望を持つことができた矢先に、絶望の足音が俺達に近づいてきた。
「君達何してんの？」
「何者だ？お前」
「誰だって良いじゃん」
柄の悪い男だ。関わってもろくなことが無さそうだし適当にやり過ごすか。
「あんさ～俺今暇だからさ～ちょっと、殺されてくれない？」シュオーン
「何⁉」
「何なんすか⁉あれ⁉」
「ひぃぃぃぃ？化物？」
目の前のチャラ男の顔が崩れ、陽炎のような物が男の体を包み、灰色の兎の耳のような物が付いた化け物へと変貌した。

「皆、俺から離れるな？」
「あっ？消えた……何処に行きやがった？」
　目を隠す能力……こんな状況であれば、どんな能力よりも最強だ。
非武闘派の俺達にとってはエクスカリバーよりも強力な武装になる。
今のうちに全力で逃げれば間に合う。
「今のうちに逃げ…ぐっ？」
「「キド？（団長さん？）」」
「ここにいたか…」
　何故バレた…？あいつには見えていないはずじゃ……ぐっ？息が……首を掴まれて呼吸ができない…それに、俺が捕まったせいで能力が切れた。
「見えてなくても気配と音でわかんだよ……それにお前やっちまえばさっきの消えるやつは使えなくなんだろ？じゃ死ね？」シュルシュル
　化け物は右手の指を針のように変化させ、俺の右目に突き立てる。
　右目ごと頭を抉り取るつもりか……糞？何て握力だ？…振りほどけない……ここで俺が死んだら、あいつらは逃げられない…誰か…誰でも良いから助け……て
　ズシャ？
「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ??」
「げほげほ？……何が起き…た」
　気がつくと、化け物が左腕を押さえながら悲痛な悲鳴を上げ悶え苦しんでいて、さっきまで俺の首を掴んでいた化け物の左腕が、足下で灰に変わった。
　何かに切断されたのか？だが何に？駄目だ……何が起きたのかわからない
「大丈夫か⁉」
「あぁ…何だ⁉お前⁉」
「これは……その」
「まぁそれは置いといて……もう終わりだ？化け物？」
　化け物の次は何なんだ⁉何かの戦闘アバターのコスプレ？助けてくれたのは助かるけど、こんな時間にそんな姿で出歩くか？常識的に

考えて。
だけど、何処かで聞いたことのある声だな、この不審者。
不し…戦闘アバターは、持っていた刃が光っている妙な形の剣を構え、ベルトに付いている携帯?をスライドさせボタンを押す。
ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ
キドｓｉｄｅｏｕｔ

# 始まりの８月１５日【５】

始まりの８月１５日【５】
シンタローｓｉｄｅ
訳がわからない……もう死んでる……？馬鹿なのか？こいつ。ならここは何か？死後の世界か？馬鹿馬鹿しい……どうせ右目の隻眼も、事故に会って、命は助かったけど右目がお陀仏したとか、そんなあたりだろ。
「もう死んだ……そんな話？はい、そうですかって信じられるわけないだろ？証拠を見せろ？」
「はぁ……一番使いたくない方法を使わせるんだね…君は…」シュオーン
「うわぁぁ？」
ユサは不愉快そうに立ち上がる。すると、陽炎がユサの体の周りを包み、ジャケットを羽織った灰色の化け物へと変貌した。
「お前…化け物だったのか⁉」
「頭の中で【殺したい】と念じてみろ」
「何でだよ？」
「良いからやれよ」
「じゃあ……何だこれ⁉　…」シュオーン
言われた通り、頭の中で【殺したい】と念じてみると、体が陽炎に包まれ、灰色のサメを元にしたような化け物に変貌した。
俺は今まで人間だと信じて生きてきたけど、こんな形で裏切らなくてもいいじゃねぇか。
「君の今の姿だ」
「僕達は一度死に、奇跡的に蘇生した。オルフェノクとして」
「オルフェノク？」
「今の姿のことだよ。一度死んで、体を再構築し、蘇生する人類の進化系。だけど、それは極稀でね。だから、オルフェノク達は、ある方法を使って同族を増やす」
「ある方法？」

「使徒再生。オルフェノクが触手や武器を使って、人の心臓に因子を埋め込む行為。だけど、これも確率が低くてね、失敗して殺してしまうことが多い。成功しても大した能力は出せない」
「じゃあ俺達みたいに死んで覚醒したのは、かなりレアってことか？」
「そうなる。それに、オリジナルのオルフェノクは通常よりも強力な力を持っているから、できればそちらの方が良い」
　意外と今の状況で冷静でいられるこいつと自分が怖い。オリジナルの方が良いかもしれないけど、そもそも化け物なんかになりたがる奴はいない
「とりあえず、元に戻るにはどうすれば良い？」
「肩の力を抜いてみろ」
「そんなんで戻れ……戻れた」シュオーン
「それと」シュオーン
「僕達はオルフェノク化しただけじゃなく、まだ何かしろ力があるかもしれない」
「何だそれ？」
「いや、確信は無いんだが……そんな気がする」
「はぁ…まだ何かあんのかよ……でもモモには何「あれ何だ？」はっ？」
　ユサが指差している窓ガラスの方を見ると、さっきの公園の辺りで灰色の化け物とパーカー姿の人影があった。
　モモ…？それにあいつら？……逃げろ？そいつは不審者ってレベルじゃない？
「ヤバい？どうしよう？……って？お前は何してんだよ？」
「良いから動くな？」
　ユサはアタッシュケースを開き、ベルトのような物を取りだして、武器みたいなツールをベルトに着けて、俺の腰に巻く。
　その次に、見慣れないデザインのリボルバー型のガラケーを開き、何かのコードを入力する。
　９１３ＥＮＴＥＲ
　ＳＴＡＮＤＢＹ

妙にくぐもった低い電子音だな。何か呪われそうな感じがして気持ちが悪い。エネの方が断然マシだ。
「何だよこれ？何する気だよ？」
「使い方は変身すればわかる」
「変身⁉頭大丈夫か⁉お前⁉」
少し響いたのか、ユサは一瞬ビクッとしてバックルに携帯を斜めからセットする。
Ｃｏｍｐｌｅｔｅ
低い電子音とともに、俺の体の周りにオレンジ色の光の線が走り、スーツが形成された。
何だよ……これ？戦闘アバターに俺自身がなったのか？ここは俺の知っている世界じゃない……完全にゲームの世界じゃねぇか…ここ
「何これ⁉」
「早く行け？今なら奴を倒せる？」
「はっ⁉どうやっ……まさか、これか？」
ベルトの右側に付いているホルスターから、変わった形状の銃を取りだし、携帯に付いているメモリースティックを、グリップに差し込む。
Ｒｅａｄｙ
電子音が銃から発せられ、グリップの下から、光の刃が形成された。
マジでどうなってやがるんだ？これ完全にス〇ーウォーズの剣だよな？俺は結局何になったんだ……

# 始まりの８月１５日【６】

俺は飛び降り中に体勢が崩れることなく着地に成功する。
何で着地まで成功するんだよ？このスーツいったい何なんだよ……国に技術提供したらノーベル賞取れるぞこれ。
目の前の公園を見ると、キドが化け物に首を掴まれていた。しかもオルフェノクは手が変形し始めていた。
このままだと死んじまう？この剣切れるんだろうな⁉切れなかったら泣くからな？
「おおおおおおおおおお？」

ガシン？……ボトッ

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」
俺は佐々木小次郎風に剣を構え、叫びながら斬りかかり、キドの首を掴んでいた化け物の左腕を切り落とす。
マジで切れた……いや、切れなかったらどうしようかと考えてたけど、切れた時のことも考えれば良かった。かなりビックリした、ハムかと思うぐらいスパッと切れたから。
「大丈夫か⁉」
「あぁ…何だ⁉お前⁉」
「これは……その」
「まぁそれは置いといて……もう終わりだ？化け物？」
俺はバックルに装着したままの携帯を開き、ＥＮＴＥＲボタンを押す。
ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ
電子音の後にバックルの端から、体の光のラインをたどり、エネルギーを送られた剣はオレンジに輝く。
いや、待てよ。何でこうすれば必殺技が使えることが分かったんだ？特にレクチャーも受けてないのに……偶然？いや、意図的にしたし

…まぁ良い？とりあえずこいつを潰さないと？
「やぁぁぁぁぁぁ??」
ズシャ？
「糞がぁぁぁぁぁぁ……ぁぁ……」
剣を忍者の様に構え、左腕の切断部を押さえながら地面で悶え苦しんでいるオルフェノクの腹部に、刃を勢いよく突き刺す。その後、オルフェノクは体から青白い炎を出しながら灰となった。
……怖い…何だよこの剣。刺したり切ったりしたら灰になるのかよ…迂闊に触ったらヤバい……灰皿行きになる。
そう言えばこの剣、銃みたいに引き金と銃口も付いてるし、剣じゃなくて銃なのか？なら、使い方によっては撃てるかもしれない。
俺はグリップからメモリを抜き去り、銃をホルスターに収納しメモリを携帯に指し直す。
「助けてくれてありがとう。あんたは何者なんだ？」
「えっ⁉いや……そのぉ」
「その声……どこかで聞いたことあるような」
ヤバい……やっぱりモモにはバレるか。大人しく変身を解くか？いや…どうしよう……バレたらバレたで面倒なことになりそうだし、打つ手がねぇ……
ガチャ
「えっ？」キュイーン
「シンタロー（さん）⁉」
「何でお兄ちゃんが⁉」
キドの野郎？いきなりベルト外すか⁉普通⁉完全に素性もバレたしどうするんだ……一回死んで、さっき死んだ化け物みたいになりましたって言うか？だけどベルトの説明はどうする？それに化け物扱いされて終わるだけだし……こんな時にエネがいれば。
「よくやったよ。シンタロー君」
「来んのおせぇよ」
「誰だ？あんた」
「僕の名前は遊佐優斗。シンタロー君のお友達かな」

まぁ…強ち間違ってはいないけど、かなって何だよ？かなって。はっきり言えば良いだろうが
「えっ⁉お兄ちゃんにお友達が⁉」
「えっ？シンタロー君って友達いなかったの？」
「カノ？そんなこと言っちゃダメだよ？」
スゲェムカつく、助けなかった方が良かった気がする。友達いるのがそんなに偉いのか？ホワイ〇〇ースの艦長にでもなれるのか？それにマリー、モモには何も無しなのは何でだ？
「キド、ベルト返せ。こいつら灰のオブジェにしてやる？」
「落ち着け？シンタロー？」
「落ち着きな。これあげるから」
「あっ？…スマホ……本当にただで良いのか？」
「良いって言ってるじゃん」
最新機種じゃねぇかこれ。しかもｌｌｔｈ社の特別製のスマートフォンって、社長の息子だからってここまでして大丈夫なのか？同族だからだろうか。
俺は早速、スマホの電源を付ける
「あっ？ご主人？大丈夫ですか⁉」
「エネ？何でこいつに居るんだ⁉」
「エネちゃん？今まで何処に居たの⁉」
「えっと……実は気絶してまして……気が付いたらこの中に」
「はぁ⁉気絶⁉電脳の体の癖に何で気絶なんかしてんだよ⁉」
「私だって気絶ぐらいしますよ？それに鉄骨落ちてきたのに、何で無傷なんですか⁉」
「それは……」
やっぱり知ってたのか……だけど、オルフェノク化したことは知らないらしいな。糞、知ってたら口裏を合わせさせようと思ったのに…更にめんどくさくなった。
「やっぱり……これお兄ちゃんのじゃないの？」
壊れてるけどわかる……これはいつ何時も俺と共に居たカナル型の白イヤホンだ。やっちまった…スマホがぶっ壊れたショックが強

すぎて、あの時回収忘れてた。
　こんな形で綻びが出るとは思わなかった。
「この血はお前のなのか？シンタロー」
「……それは「まぁ彼にも話せないことがあるしさ、質問攻めは止めてあげてくれないか？それと、いきなりで悪いけど、君達の基地に連れて行ってくれないか？」」
　こいつ何を？だけど、助かった。俺だけだったら、黙り込んでしまうか、オルフェノクの姿を見せてしまいそうだったし、こう言うフォローは本当にありがたい。
「えっ？何で知ってるの？」
「話したのか？シンタロー」
「いやわかるよ、君達の格好で。だって君達、どう見たって何かの中二集団じゃないか」
　いや、お前には言われたくないだろう。中二病重篤患者のような風貌のお前にだけは
「中二…」
「中二？」
「中二…ぷぷっ？」
「わかった、連れていこう。だが、覚悟してもらうぞ」
「大丈夫さ」
　覚悟って……拉致られて急に入団させられた俺はどうなるんだよ？ヒキニートには人権なんて無いのか？
　遊佐と俺（遊佐に無理矢理引っ張られて）は真夜中の公園をキド達と立ち去り基地に向かう。それと、今一番気になるのは、何故かキドはベルトを返してくれない。ただ忘れてるのか、ベルトを気に入ってしまったのか、かなり自然体でベルトを握り締めている。

良いから返せ

# 始まりの8月15日【7】

ゾンビが出てきそうなダクトや水道管だらけの、人気のない薄暗い裏通りを通り、俺達は基地の入り口?らしきドアを開き、ゾロゾロと入っていく。

こんな不気味な場所から出入りするのかよ……まともな神経のある奴のすることじゃない。これだから中二病患者とは関わりたくないんだ。正常な人間までも、底無し沼に引きずり込もうとする。

「素敵な部屋だね」

素敵だと……この天上の高い落ち着かない部屋がか?何かのお世辞?それならセンスない……だってつまらないもの。本音だとしたら、中身まで見た目通りな奴だ。

「まぁここに座ってよ~キドの恥ずかしい話は座って聞い…いだっ?」

「おい?ベルトで殴るなよ?てか返せよ?」

「……あぁすまん」

こいつ……あいつの頭ベルトで殴る時、何の躊躇いも無かった……壊れたらどうしてくれるんだ。まぁ俺のじゃないけど

「で、このベルト何なんだ?」

「カイザギア……あの姿に変身するためのツールさ」

「そんな名前だったのか」

「それよりもお兄ちゃん、そのジャージの破れた部分の血は何?……」

やっぱり聞いてきたか……まぁ聞かない方がおかしいよな。見せるべきだろうか?……いや、化け物だと知ったらあいつらだって……だけど、これ以外に良い言い訳が思い付かない。軽蔑されたらもう一生、あいつの世話になることになるな……まぁそれも悪くはないかも

シュオーン

「ひぃ?ししっ…しっシンタロー!?」

「マジか…クス」

「さっきのと同じやつか⁉」
「どうゆうこと……お兄ちゃんが…」
「シンタローさん……が」
　やっぱりこう言う反応するよな。目の前で知り合いが化け物に変異して、冷静な方がよっぽど化け物だ。これが正しい反の……あれ？おかしいな……涙が出ている気がする…でも、この姿じゃ涙なんて出ない。
　感傷に浸ろうとした瞬間、テーブル　に置いたスマホから声が聞こえる
「御主人」
「何だよ……？」
「姿は変わっても、中身は何も変わってないんですよね？私達を殺そうと思ってたりしませんよね？と言うか、昨日、百合百合な漫画読んでた御主人ですよね？」
「殺しなんてするわけねぇだろ？って何でその事知ってるんだ⁉」
「で～す～よ～ね？御主人にそんな度胸無いですもんね？」
　何だろう？凄ぇイラつく。俺が生前の時と性格が変わってないことを信じてくれているらしいが、この人を舐めきった口調と笑い声、そして人の羞恥を笑い物にする性格が俺の信頼度をぶち壊す。
「ま…まぁ、お兄ちゃんがそんなことするはず無いよね……じゃないと守ってくれなかっただろうし」
「それもそうだな。すまなかったシンタロー…助けてくれたのに」
「ごめんね…シンタロー」
「シンタローさん、すみません」
　あれ？案外すんなり信じてくれた。それも助けたことが理由で。どうだエネ？これが俺の人望の厚さだ？そこらのラノベ主人公とは違うんだよ？
「別にいい」
「それで、何故その姿になったんだ？」
「ちょっと？キド。それは駄目だよ」
　良かった～漫画のこと追求されなくて。あれのことバレる方が、俺

的には一回死んだことがバレることよりヤバイからな。結構過激だったし、モモとマリーには見せられん。
「あぁ実は一回死んで、覚醒したんだよ…オルフェノクに。証拠はこの破れたジャージと血痕」
「「一回死んだ⁉」」
「あぁ、でも今は生きてる」
「オルフェノクってさっきの姿のこと？」
「そうだ。俺は死んだことで極希の確率で蘇生できたんだ。だから前と変わらない」
「３つ言い忘れてたことがある」
ソファーで座っていたユサが急に立ち上がり、意味有りげな表情で話始めた。
そういえば、こいつさっき笑ってたな。オルフェノク化したのが馬鹿馬鹿しかったのか？だけど、何故か聞くのが怖い。まるで毒蛇の口に指を入れるかのような恐怖心を感じた。
「そのベルト……オルフェノク以外が変身すると、５分後には死に至るから、絶対に変身しないでくれよ。キドさん」
「「えっ？」」
「キド……ぷぷ…何でベルト着けてるの？」
「いや…その……団長として、団員にこんな危険な物を使わせるわけにはいかないと思って」
いや、ただ気に入ったんだろ？カイザギアを。とりあえず返せよ、それは俺にしか使えねぇんだから、お前が持ってても意味無いじゃん。ただの痛々しい奴にしか変身できないよ？
「まぁとりあえず、この基地の場所を知ってしまったからには、この団に入ってもらおう」
その勧誘のやり口、詐欺と何ら変わらねぇじゃん。いつか訴えられるぞ。て言うか、俺が今すぐ訴えたい。俺の優雅なニート生活を潰された報復として。
「無論そのつもりさ。後、シンタロー君、スマホはあげるけど、基地や帰る場所があるなら、さっきの部屋の話は無しで」

「そんなのありかよ？」
「世の中甘くないってことだよ」
「何の話？お兄ちゃん」
「あっ？いや？それは……と？とりあえず？後二つを早く話してくれよ？」
「キョドりすぎ、じゃあ二つ目について話そうか」

# 始まりの８月１５日【８】

「……実は僕もオルフェノクなんだ」
「やっぱりな」
　何が、やっぱりな、だよ。絶対に俺が正体明かさなかったら、お前今ビビってただろ？
「それとオルフェノクについての説明もしよう」
「よろしく頼む」
　それからユサは、俺にしたのと同じ説明を連中にした。
「説明上手いですね」
「別に上手くはないよ」
「なるほど、だいたいわかった」
「わかった所で、そろそろ変身解こうか？シンタロー君。それに団長さん」
「って？お前まだベルト着けてたのか⁉」シュオーン
「シンタローこそ？何で変身したままだったんだ⁉」
　よっぽど恥ずかしかったのか、顔が真っ赤だ。て言うか、ベルト返すタイミング結構あったのに、何で返さないんだよ？その事の方が、俺がずっとオルフェノク態で
　居たことよりおかしい。
「そういえば、オルフェノクの姿でも何かもう怖くないよね～お兄ちゃんだし」
「わかっちゃえば怖くないね」
「失礼っすよマリー」
　失礼なのはお前もだ
「何か自然体だったよね～」
「御主人、威圧感０ですよね～」
　人が黙って聞いてりゃあ調子に乗りやがって……揃いも揃って失礼な奴しかいねぇじゃねぇか、この団。
　人がどれだけ覚悟決めて、姿晒したと思ってやがる。

「言いたい放題言いやがって……って言うか早く返せ？」
「あぁ…すまん……」ガチャ
キドは可愛がっていた子猫を取られた子供みたいに、不服そうに目を反らしながらカイザギアを返す。
中二病と言うかガキだこいつ……そこまでふて腐れることじゃねえだろ。そもそもお前のじゃないし。まぁ俺のでも無いが
「ほら、返すよ」
「それは君にあげるよ。僕は戦いたくないし」
アタッシュケースも渡してくれるとは親切な奴だ。だけど、自分は戦いたくないから、俺に押し付けるってことだよな？まぁ戦いたくないってのはわかるけどな
「そうかよ。で３つ目は？」
「あぁそれはねぇ……」
ユサは顎を上げて、手を左目辺りに一瞬当てて話始める。
俺もこれからこのポーズ使おうかな。流行りみたいだし
「目に関する能力……持ってるよね？」
「まさかユサ君も？」
「そうだよ。カノ君」
「何でカノの名前知ってるの？」
あれ？まだ自己紹介してないよな？キドは最初に名前が出てたけど、カノの名前はまだ知らないはずなのにいつわかったんだ？
「君達についてはこの目が教えてくれた。キドさん、カノ君、マリーちゃん、セト君、モモちゃん、エネちゃん」
「相手の素性を読み取る能力か……」
そうだとしたら、仲間としては頼もしくなるけど、カノと手を組まれたら……遊ばれるかもしれない……俺が
早く対策を考えなければ、二度目の死もあり得る。
「僕の能力は、目を見透かす、相手の情報を読み取る能力さ。だけど、名前ぐらいしかわからないんだけどね」
「範囲はあまり広くないと言うことか」
「まさか君にも能力があったなんて驚きだなぁ」

「俺と似てるっすね」
「ちょっと待て、俺は能力なんて無いぞ？」
「シンタローさんは特別っすから」
　何だよ？特別って
「お兄ちゃんは能力なんていらないじゃん？ＩＱ１６８だし……」
「ＩＱ１６８……凄いな……シンタロー君」
「だけど、モモちゃんは前のテスト２点だったらしいね（笑）」
「わぁぁぁ？何でそれのこと知ってるんですか⁉カノさん？」
「しかも二点分は楽描きだから、実質れ……痛っ？何で殴るんだよ⁉意味わかんねぇ？」ドガッ
　モモは相等頭に来ていたのか、自分の失態をばらされて恥ずかしいのか、何の躊躇いも無しで、俺の顔に大振りの右フックをかます。
　アイドルの癖に、兄貴の俺より腕力が有りやがる（兄貴の威厳は何処に）。頭と味覚と美的センスは壊滅的な癖に、力業に関してだけは兄貴を超えてやがる（お前がひょろいだけだろなんて言わないの）
「お兄ちゃんデリカシー無さすぎぃ？だからいつまで経っても、年齢＝彼女いない歴更新中なんだよ？」
「その事は言うんじゃねぇよ？更新中ってなんだよ⁉別に彼女なんて作ろうと思えば「無理」早いわ？」
「もう？御主人のモテない話なんてどうでも良いんで、明日は絶対に連れていってくださいよ？遊園地？」
「どうでも……」
「良いね～なら皆で行こうよ～遊園地」
「私も行きたいな～」
「マリーが行くなら俺も行くッス」
「なら団長として俺も行かないわけにはいかないな」
「普通に言えば良いの……いだだだだ？ごめんなさい？もう何も言わないから？」
　キドは半笑いで煽りかけるカノの右腕をあり得ない方向に折り曲げる。
　これは個性的な愛情表現として取ってもよい物なのか？カノの苦

しみ方を見る限り、キドは手加減をしていなさそうだが……
「じゃあ決定ね。お兄ちゃん」
「俺に拒否権は「無い？」ですよね～」
「僕も行くよ。楽しそうだし」
「じゃあ明日の朝早くから行こう。混む前に」
「そうですね？そう言うことだから、お兄ちゃん。明日は早く起きてね」
「いや「やるの」ｙｅｓ　ｙｏｕｒ　ｈｉｇｈｎｅｓｓ」
　咄嗟にモモを格上と認めてしまった……もう終わりだぁ…兄としての威厳は完全に無くなったし、ジェットコースターと人混みが死ぬほど苦手なのに、それを明日、満喫しに行くなんて……しかも、明日はかなりの悪天候（晴れ）だし、まさに地獄だ。
　俺とモモは明日に備えて、家に帰宅した。その後、俺だけ母に説教された。何で俺だけ？
　明日もし生きて帰って来れたら、この自室を出ないことを俺は誓う……絶対に誓う？
　俺は生き残る可能性を信じ、眠りに着く。

生き延びたい……
シンタローｓｉｄｅｏｕｔ
始まりの８月１５日　　完

# 存在しない１６日の日々
# 存在しない１６日

？ｓｉｄｅ

誰もが寝静まる深夜のトンネルの深い暗闇の中に、アーマースーツの光が、オレンジ色に光っていた。

「こいつも違うのか……糞？時間もねぇってのに？」

「さっさと見つけないとな…あの人を殺した糞野郎を……」

？ｓｉｄｅｏｕｔ

シンタローｓｉｄｅ

緑川ライトニングパーク。

最近出来上がった遊園地で、夏休みでもあるから客が多すぎる。この中で長時間遊ぶぐらいなら、道頓堀川を平泳ぎで泳ぐ方が健康的だ

「すいません遅れちゃって」

「いや、俺達も今来たところだ」

「モモ……はぁ……手…はぁ…放しぇ…」

「本当に体力無いね？お兄ちゃんは？セトさんを見習ってよ」

モモと同じペースで走ったせいで、俺の体力はレッドゾーンに達していた。しかも、カイザギアを持ってきたおかげで、かなり走りにくかった。

息を吸うだけで、嘔吐中枢を刺激されて吐き気がする…と言うか、いっそぶちかましたい。無理に起こされたのも一つの理由だな……

「大丈夫すか？シンタローさん」

「カイザギアもちゃんと持ってくるとは良い心がけだ」

「……はぁ…はぁ…大丈夫じゃない」

「はぁはぁ言って変態ですか？御主人」

「しゃあねぇだろ？無理矢理走らされたんぞ？画面の中のお前とは違

うんだよ？」
　スマホ相手に怒鳴り付けている、目付きの悪い男の絵面……考えただけでもおぞましい。
　きっと周りは「何こいつ？」って思いながら白い目で俺を見るだろう。だけど、この怒りをどうしても抑え込むことができない。
　自分は走って息を切らしているのに、画面の中で余裕ぶった笑みを浮かべるこいつの表情がどうしても許せない
「変態…くくっ……お兄ちゃん……ふふ」
「やめてください？カノさん？お兄ちゃんがこれ以上気持ち悪くなるのは嫌です？」
「モモ……てめぇ」
「まあまあ、気にしたら負けですよ　御主人」
「お前ら……ころ「早く行くよ？お兄ちゃん」だから引っ張るなよ？モモ？」
　カイザギアを開けようとした俺を、モモは引きずるかのように、腕を無理矢理引っ張り走る。それにカイザギアが膝に当たって糞痛ぇ。
　ゲートを通って、俺達が最初に向かったその先では、見るのもおぞましい悪魔が待ち構えていた。
　……ジェットコースター……それは人間の三半規管を破壊する悪魔の兵器
「いきなりこんなでかいの……」
「今なら空いてるし早く行こうか」
「マリーは嫌だよな？な？」
「早く乗りたい？」
　マリーの輝いている目は、ジェットコースター一点にしか向いておらず、嫌がっている素振りを全く見せない。
　どう見たって、こう言うの苦手なタイプだろ？マリーは。何で目輝かせてるの？何で楽しそうなの？マリーが嫌と言えば、俺も便乗して逃げようと思ったのに……お願いだから嫌だと言ってくれよ。飴玉あげるから
「行くっすよ？マリー」

「うん？早く乗ろう？」
「ほら、お兄ちゃんと団長も」
「俺は……残る…ってキサラギ？引っ張るな？」
「やめろモモぉ？」
「二人とも……くくっ」
俺とキドは暴れん坊将軍（モモ）の暴虐によって、ジェットコースターに乗るはめになった。
嫌がる人間を無理に連れていくのはどうかと思う。そして、キドも苦手だったのか、釣られた魚のように全力抵抗している。その姿は、団長としての威厳を破壊するのに十分なくらい酷いものだった。
「待って？下ろして？話せばわかるから？」
「シンタローうるさい」
「仕方ないじゃん？今から処刑されるんだから？」
「大袈裟っスよ」
「キド……ふふ……お経はないよ…ふふ」
あいつ、とうとうお経唱え始めるまで壊れたか～……処刑前だし無理もないよな。
コースターは徐々に処刑台へと上って行き、俺のメンタルゲージを根こそぎ削っていく。
これが俺の１８年の人生の最後になるとは……せめて童貞は卒業したかった。
コースターが最高地点に到達し、いよいよ惨たらしい処刑が始まる。
「きゃあああああ」
「わあああああああ」
「うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「ヒイイイイギャアアアアアアアアアアアアアア???」

# 存在しない１６日

モモｓｉｄｅ

ジェットコースターごときで虫の息になったお兄ちゃんを放置して、少し顔の青い団長さんとマリーちゃんと、買い替えたスマホに入って来たエネちゃんと一緒に、次のアトラクションを探しに行くことにした。

あれで虫の息になるなんて、全くお兄ちゃんは貧弱だな～……ユサさんはずっと笑顔のままだったのに。そう言えばユサさんとはまだちゃんと話せてなかったなぁ……何かお兄ちゃんがかなりお世話になったし、オルフェノクだと言ってても、紳士的で良い人だな～……だけど、何か違和感あるんだよね。あの人

「どうした？浮かない顔して」

「あっ？いえ……お兄ちゃん大丈夫かな～と思って」

「豚肉の御主人なら大丈夫ですよ？たぶん」

今、豚肉って言わなかった？エネちゃん……お兄ちゃんのこと……まぁいいや

「そ…そうだよね？お兄ちゃんってば、あれごときであんなに……そう言えば、団長さん。顔色悪いですけど大丈夫ですか？」

「あ…あぁ？大丈夫さ（震え声）」

いや、絶対大丈夫じゃないよこれ……ここまで顔が真っ青な大丈夫、始めて見たよ。そんなに苦手だったんだ……ジェットコースター。お兄ちゃんは良いとして、団長さんには悪いことしちゃったな。

「ねぇキド、次はあれにしようよ」

マリーちゃんが次に興味を持ったのは、メリーゴーランドのようだ。でも、お客さんは誰も居なくてガラガラだった。ジェットコースターばっかりにお客さんが居たから、こういうのは反動でほとんど人がいない。

「あぁ、あれなら」

「よし行きましょう？」
「おい、キサラギ？マリー？引っ張るんじゃない？」
楽しい時間……ずっと続くと思ってた。皆と遊園地に行くのは、凄く楽しみで眠れなかった。だからこそ、ずっと続くと思ってた……

ほんの五秒前までは……

「やあ、お嬢さん方」
「誰ですか？…キャァァァァァ？」
後ろを振り返ると、蟷螂の鎌のような鋭利な両手を持つ灰色の怪物が、こちらにゆっくりと近付いてきていた。とうとう、私に、オルフェノクの人達にもファンができるなんて……って？冗談言ってる前に逃げないと？だけど、体が固まって動けない？
「オ…オルフェノクか⁉……また能力が効いていないのか⁉」
「何言ってんのか知らねぇが、久しぶりの狩りじゃ「うるせぇんだよ？」ぐはっ？」ゴスッ
襲いかかろうとしたオルフェノク
が、横から来た人物によって、与えられた衝撃に吹き飛ばされる。その衝撃を与えた人を見ると、オレンジ色の光の線が目立つ、アーマースーツを纏っていた。しかも、このスーツは……

お兄ちゃんの変身していたカイザ

だけど、お兄ちゃんはあんな清涼感のある声じゃなかったし、それに、あんなに姿勢は良くなかったはずだった。じゃあ、あの人は誰？
「てめえ？何も…うっ？」ゴフッ
「汚い声を出すな……」
「お前……絢瀬絵里を知っているか？」

「……げほっ………知っているも何も…俺が殺し…ぐあっ?…」ドガッ

カイザはオルフェノクが最後まで話終わるのを待たずに、胸元に重い拳を放つ

「やっと見つけた…………お前だけは…殺す………殺す…………殺す殺す殺す殺す殺す殺す?…」

「待ってくれ?…俺は…ぐはっ?…」バキッ

「言い訳なんて聞くわけないだろ⁉…」ドガッ

　狼狽えるオルフェノクに、カイザは間髪を入れずに、大振りの拳と蹴りを、的確にウィークポイントに当てる。

　あの人………相手がオルフェノクとは言え、やり過ぎなくらい、殴り続けるなんて正気なの?しかも、脆そうな場所ばかり狙ってる。まるで怒りを人の形に具現化したみたいに見える。

「どうだ無抵抗にやられる気分は?……今までお前がしてきた行為をいざ食らう気分は」

「………何で…お前の攻撃………そんなに重たいんだよ?ぐはっ?」ゴフッ

「質問に答えろよ…お前は無視できる立場じゃないんだ………答えろ?」

　カイザは膝から崩れ落ちたオルフェノクの溝内や後頭部を、休むことなく殴り続ける。

　あのカイザになってる人…………私達を助けたんじゃなくて、ただ、あのオルフェノクに恨み辛みをぶつけに来ただけみたい。だけど、あのオルフェノクも自業自得なんだろうな。

「待ってくれ?…これ返すから?」シュオーン

　オルフェノクは人間に戻って、フードのポケットから白いシュシュのようなものを取り出す。

　その直後から、カイザの人からは凄く強烈な負の感情のようなものが溢れ出ているように感じる…………あのシュシュ…もしかして

「………やはり…お前か」

「すまん?だから命だ…うぐっ?…」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す????」

「やめ………」

カイザは男の首を掴み、一気に締め上げる。まるで、蜜柑を握り潰すかのように

「無事か?モモ?」

「あっ?お兄ち……えっ?」グチャ

兄に会えたことで、この状況から助かると思った喜びでいっぱいになった瞬間に、顔に何か温かい液が付いた感覚を感じ、拭って見ると、それは鈍い赤色で凄く鉄臭かった。その液が飛んできた場所を恐る恐る覗くと…………

どう見ても……見間違えることはなく……いや、見間違えることはできなかった。地面に転がった，頭，と，体，を見るまでは………

「い

やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

??」

モモsideout

# 存在しない１６日

シンタローｓｉｄｅ

駆け付けた時に目の前に写ったのは、首を握り潰されて、胴体と頭が離れて灰化した糞野郎と、それを見て顔を青ざめて硬直しているキドと、悲鳴を上げて気絶したモモとマリー、そして、右手に白いシュシュを握り締めた返り血まみれのカイザだった。

間に合わなかった……こんなに惨たらしく殺すなんて……それに、片手で首を握り潰すほどの力を出すとは……あの綺麗な顔からは想像付かないほど、汚くて残虐だ……

「マリー？モモさん？大丈夫っすか？」

「大丈夫、気絶してるだけだよ」

菅山は右手に持ったシュシュに何か思い入れがあるのか、ひたすら悔やんでいる様子を見せている。

「絵里……っ…助けられず…すいませんでした……っ」

「酷い…」

「酷い…？笑わせるな？こいつはこれだけの仕打ちを受けて当然なんだよ？ただ、執行者が僕になっただけだ……」

「だからって、ここまでする必要はあるのか？」

「そんな偽善心は必要ない…僕は守れなかった人の為に戦った。手段なんて関係ねぇ…これが正義だ」

手段なんて関係ない……それだったら、やっていることがいくら敵討ちでも、そこで灰になってる蟷螂野郎と変わらないじゃないか

「お前の信じる正義って、私怨でオルフェノクを殺すことなのか？」

「知るか。少しは自分の頭で考えやがれ。僕は前の世界では選べなかったから仲間を失った。この世界でもだ。だから、戦う覚悟が無いなら今すぐベルト捨てな。どうせ戦わないならいらないだろ？」

菅山はカイザフォンを右手で外し、変身を解除する。

戦う覚悟……確かにまだできてないかもしれない。だけど、俺の信じる正義が偽善だとしても、俺は人としての倫理を失ってまで、

戦いたくない。
「ぐっ？……とうとう来たか？」
「大丈夫か⁉」
「……触るな？」
　胸を抑えながら苦しむ菅山の体からは、オルフェノクの滅びを告げる青白い炎が現れていた。
「……こうなる…覚悟がない…なら……ベルトを……捨……て」
　菅山の体は青白い炎と共に、みるみる灰となり、カイザギアごと跡形もなく崩れ落ちた。
　一度見たことある光景だが、あの時は興奮していたから、あまり気にしなかったが、ここまでしっかりと目に焼き付いてしまうと、体の中に虫が這いずるような不快感が増し、吐き気に襲われる。
「戦う覚悟……」
「とりあえず、二人を運ぼう。キド立てる？」
「あぁ……立て…る」
　惨たらしい光景を目の当たりにしたせいか、キドはかなり顔色が悪く、立ち上がるのすらやっとの状態だった。モモとマリーは全く目を覚まさない。これからずっと目を覚まさないんじゃないかと凄く心配になっていたが、菅山の言葉と死に様が頭を過って、体が全く動かない
「御主人？……大丈夫ですか？」
「お前か……戻ってきたのか…大丈夫だよ」
「大丈夫には見えませんよ」
「シンタローさん、ちょっと休んだほうが」
　そんなに顔色が悪いのか。そう言えば、汗を凄くかいてる。いくら暑くても、ここまで汗をかくことは無いはずなんだが……
　バチッ？バチッ？バチッ？バチッ？
「「何だ⁉」」
　モモとマリーとキドの頭の辺りに、赤い稲妻が走る。稲妻の走った方向から察するに何かから発射されたみたいだ。だけど、発射された

方向を見ても誰もいなかった
「ん……お兄ちゃん」
「モモ？大丈夫か？」
「……いったい何があったの？」
「はっ？」
　どういうことだ？あんな物を間近で見て、気絶までしているのに、まるでわかっていないような顔をしていやがる……
「…あれ？…私、寝ちゃってたの？」
「……何で俺はここに？」
「シンタロー君……これ」
「あぁ…これって」

，記憶が消えている，

　としか考えられない。そうでもないと、ここまでいつも通りの表情でいる理由が見つからない。だとしたら、原因はさっきの稲妻か？誰かが意図的に記憶を消したとなると、余計にわからなくなる。だが、一発だけ多かったような気がするが……もしかして、俺も狙われていたのか？
　ピローン
「御主人、ユサさんからＬＩＮＥ来てます」
「そう言えば、あいつ水買いに行ったきり戻ってこないな」
「向こうでも何かあったんですかね？」
　あいつも一様、オリジナルだし簡単にやられるとは思わないが、いや、やられてたらＬＩＮＥなんてできないか。

　ユサ
　すまない。
　ヤボ用ができたから先に帰るよ。

あいつ、勝手に帰っただけじゃねぇか。個人プレイヤーすぎんだろ。人のこと言えないけど
「ユサ君なんて？」
「……帰ったらしい」
「じゃあ僕らも帰ろうか」
「あぁそうだな。何故か体がダルいし」
「私も何か体がダルいです」
本当のことを知ればダルいじゃすまなくなるな。
俺達は足早に遊園地から立ち去り、俺とモモは自宅に、あいつらはアジトに帰った。
だが、その夜、菅山の最後の言葉と謎の赤い稲妻が脳裏に過って、全く眠りに付くことはできなかった。
シンタローｓｉｄｅｏｕｔ

？ｓｉｄｅ
「ちっ？一発外したか……まぁいいや。」
「デルタの力は残留する。力を手にするのは素晴らしい？あっはっは？」

ピュン

一発の弾丸が高笑いをする男の頭を突き抜け、男の高笑いと共に息の根を止める
「こいつも失敗か」
「まさか被検体二つが駄目だったとは……改良しないとな」
？ｓｉｄｅｏｕｔ

# 呼び出された１７日の怪奇
# 呼び出された１７日

カノｓｉｄｅ

昨日、灰になったカイザの変身者の亡骸の中で、見つけた「調査記録」と書かれたＵＳＢメモリーを持ち帰り、深夜から朝まで調査していた。ロックは意外と簡単に外すことはできたけど、破損データだらけだったため、気になる情報を探るには凄く時間がかかってしまった。

それぞれの日付を見る限り、彼はだいぶ前から調査を始めていたみたいだ。

「まずはこれから見るか」

デルタギア

ライダーズギア１号機

試験機として製作された物だが、高すぎるフォトンブラッドと内蔵されたデモンズスレートを完全に物にするのは難しく、オリジナルしか扱いきれな……

Ｙ　ｈｔ

１８歳没

近隣の川で溺死したが、……レイン

が回収、人工オルフェノクの被検体として使用されたが、肉体は蘇らず、……で保管ｓ……

何だよこれ？重要な所が壊れてる……結局、「デルタギア」の情報も半分は壊れて見れないし、特に調べた意味無かったなぁ。ん？「Ｙｈｔ」？配置的に名前かな？これが判ればもっと話が進展するんだろけど、今は何もわかんないし寝よ……

カノｓｉｄｅｏｕｔ

シンタローｓｉｄｅ
今日も今日とて、生憎の晴れ。曇一つ無い空には、世界を滅亡に導く魔王のように太陽が紫外線を放っている。
何故、ニートである俺が太陽光線が撒き散らされている激戦地に居るのかと言うと、二日前に買い損ねたキーボードを買うためにわざわざ外に出たのだ。
今は力尽きて、公園のベンチに座り込みコーラのペットボトルに口を付けていた。
「死にそう……」
「大丈夫ですかぁ？御主人」
「大丈夫なら死にそうなんて言わない……」
暑すぎるためか、冷たいコーラが喉を通る感覚が凄く伝わる。だが、体に入ったコーラがすぐに蒸発していくような気がしてきた。今日だけでも１０kgは落ちたんじゃないか？
「よし、帰るぞ」
「御主人危ない？」
「えっ？…あべしっ？」ゴス
何かに踏まれた⁉しかも、立ち上がったタイミングで踏まれた⁉
……やべ……意識が
「御主人？」

「ごめんなさい」
「痛ぇ……まず何でお前落ちてきたの？」
「人を……探してて」
うぜぇ……ノロノロ喋りやがって…しかも、何でコスプレしたまま人なんか探してんだよ？こんなゲームキャラ居たっけ？主人公キャラか？なら尋ね人はヒロインか？いや、ヒロイン役のコスプレイヤー

か（笑）
「で？どんな奴なんだよ？」
「……これ位とこれ位の男の子と女の子」
「わかるか？もっと特徴とか無いのか⁉」
「……わからない」
「……警察行けよもう」
「警察？」
　はっ？ちょっと待て、？って何だよ？まさか警察わかんねぇのか？いやいや……それは無いだろ。一般常識だし…でも格好と尋ね人の特徴の答え方から察すれば納得だわ。
「お前……何なの？」
「僕はコノハ」
「……そう言えば、何処かで見たような面だな」
「僕は君のこと知らないよ」
「わかってるよ？んなこと？」
　そう言えば、さっきからエネがやたら静かだな……電池切れか？まぁ静かだしいっか。
「とりあえず、他に知り合いはいないのか？」
「いるよ」
「そいつは何処に？」
「わからない」
「……お前、何なの？」
「僕はコノハ」
　ぐうの音も出ないってのはこの事を言うんだな。こいつと話してたら命が削れていくような気がするほど疲れる。
　何で一般常識すらわかんねぇんだよ……もう疲れた……帰りたい
　俺はさっきのコーラを喉奥に注ぎ、体の乾期を終わらせる。
「おーい、コノハ君」
「誰だ？」
「ここにいたんだ～探したよ」

スゲェイケメンだな。中性的で俺が女子なら一発で惚れてるぐらいだ。何かのアイドルグループのリーダーか？ならモモと会ってるかもしれない。サインもらおうかな
「あんたは？」
「僕はキラ・ヤマト。君は？」
「俺は如月伸太郎。聞き慣れない名前だな。外国人？」
「ん～…ここが何処かわからないから……でも言葉は通じるからこの国の人ってことで」
また変な奴が来たな……しかも、外国人で適当ときた。もうお腹いっぱいになってきて驚いたりはしないが、凄い疲れそうだな……帰りたい。
「ちょっと話を聞かせてくれないか？誰かを探してるらしいけど、こいつじゃわかりにくくて」
「良いよ。ならこれを食べながらでも話そうよ。コノハ君も」
「ありがとう」
「サンキュー」
キラは肩から下げていたクーラーボックスからモナカアイスを取り出して、俺に手渡してくれた。

何だ……良い奴じゃん

# 呼び出された17日

モナカの中身はバナナアイスで、最近、新発売したバナナモナカだった。少し食べてみたいと思っていたから、これはありがたい。正直、アイス貰ったし人探しなんかどうでもよくなってきたな。
「実は僕も、同じ説明を受けただけなんだよね。だから、ちょっとわからなくて」
「何だそりゃ？意味無いじゃん……」
今ここにいる時間が無駄に感じた俺は、足早に立ち去ろうとしたその時、キラは言い訳をほざこうとしている子供のように言葉を発した。
「でも、途中でそれっぽい子達を見つけて、発信器を着けたんだよ」
「なら俺と話している場合じゃないんじゃないか？てゆうか、発信器？」
「それがね……」
キラは鞄からノートパソコンを取りだし、この町らしきマップが映っている画面をこちらに見せる。
こいつ、実は町一つをひっくり返す程のウイザードハッカーじゃねぇの？ブラインドタッチの速度は異常だし、発信器何て物使う時点で何か裏の顔がありそうだ。
「発信が途切れたんだよ。壊れたのかな？」
「何⁉……また面倒なことに」
全くもってついてねぇな、俺もこいつらも。尋ね人の場所がわからなくなるのは、最悪、事故にあったか誘拐されたか、もしくは殺されたか、考えたくはないがそんな所だろう。
「警察に届けようぜ……ってどんなガキかわかんねぇんだった」
「とりあえず、このアイスを食べ終わったら……って、何を見てるの？コノハ君」
「いたよ。あの子達」
コノハの指差す方向に目をやると、そこには小学6年か5年くらい

の男女二人がいた。それだけならまだ良かった。
だが、全身灰色のカエルの頭が付いた化け物に、首を捕まれ殺されかけている光景は、誰が見ても異常な光景だ。
それなのに、コノハは顔色一つ変えない。自分たちの尋ね人……いや、子供が殺されかけている光景を見て何とも思わないのか？ただ指を差しているだけで、それ以外は何も言わないし、ゲームのＮＰＣのキャラみたいに見えてきた。
「ヤバい？早くいかないと？」ガチャ
「あの人は何をしてるの？」
冗談か……？オルフェノクがガキの首に手をかけているのを見ても何をやっているかわからないなんて言わないよな？
「はぁ⁉わかんねぇのか⁉ガキ共殺されかけてんだろうが？」
「殺す……？殺すこと……それは酷いこと。それは許さない」ズダン
「えっ⁉」
「ぐえっ？」ガン
コノハの瞳が赤く変色した途端に、人間業では到底不可能な跳躍で飛び掛かり、オルフェノクの頭に蹴りを入れる。
蹴りを受けたオルフェノクは吹っ飛んだが、子供たちは軽くその場に打ち付けられただけで済んだ。
だが、コノハは一応生身だし、いくら強くても四徒再生を受ければ終わりだ。ここは俺がやるしかない。
「ちょっと、シンタロー君」
「なんだ？」
「カイザギア……それをどこで？」
予想通り知ってたか。ならこのベルトやオルフェノクについて、ユサ並みには知っているかもしれないな。だが、話は後だ。
９１３ＥＮＴＥＲ
Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ
「話は後だ…って離せ？」
「駄目だよ？それを使えば死ぬかもしれない？」
「俺は大丈夫なんだよ？離せ？」

「何故わかるんだ？……うわっ？」
「変身？」
Ｃｏｍｐｌｅｔｅ
俺が死なないように変身を妨害していたキラを振り払い、カイザに変身した。こいつの判断は正しいかもしれない、だけど、それは偽善だ。俺が戦わずに逃げたら、あいつら三人は死ぬかもしれない。俺が加勢すれば助かる確率は上がる。
ずいぶんとこいつがあるだけで勇敢になれるもんだ。カイザギア……いや、オルフェノクじゃなかったら逃げてるだろう。だから俺もキラを責められない。全く嫌になる、自分の弱さを無かったようにする自分が……。
「行くぞ？両生類がぁ？」
Ｒｅａｄｙ
ブレイガンを手に取り、グリップにメモリを挿し込み、フォトンブラッドの剣を生成する。

# 呼び出された17日

「痛いんだお……何するンゴ？」
「酷いことは……許さない」
「そんなこと知らないんだ……おっ？」ガシン
　聞き慣れた……いや、見慣れた気持ちの悪い喋り方をするオルフェノクの右肩に、駆け付けた俺はブレイガンで斬りかかる。その瞬間、オルフェノクは汚い声を発して、汚く崩れ落ちる。
「大丈夫か⁉」
「なんだよ……また化け物か……⁉」
　最近のガキは仮面ライダーすら知らないのか？この見た目なら分かりやすいはずなんだが……いや、仮面ライダーどうこうよりも助けてくれた恩人を化け物呼ばわりってどういうことだよ。最近のガキは礼節も弁えないのか？
「お前……何なんだお？動画撮影の邪魔なんだお？」
「動画……あのカメラがそれか」
「せっかくのロリショタ殺害動画が台無しなんだお？」
　まさか三脚まで立ててガキ共殺すところを撮影しようとしてたのか？……正気の沙汰とは思えない。まだスカートの中を盗撮してる奴の方が倫理的に感じる。つまり、人の……未来あるガキ共の命を自分の娯楽のために遊び殺すつもりだったのか……

　死ぬほど吐き気がする

　俺はブレイガンのコッキングレバーを引き、カメラに向かってブレイガンを構える。
　Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ
　バァァァン？
「ムギャァァァァァ？何するんだお？カメラどうしてくれるンゴ⁉」

「知らねぇよ……てめぇの如何わしい趣味に付き合う気はねぇんだよ」
「如何わしい⁉これの何処が如何わしいんだお⁉」
「うるせぇよ……お前はこの場で死ぬんだから、これ以上何か知る必要あんのか？」
「ムキィィィィ？さっきからボソボソうるさいンゴ？もう殺…ムキャ？」バァァァン？
「うらぁぁぁ？」
　オルフェノクの顔にフォトンブラッドの弾丸を叩き込み、その怯んだ隙に、力任せの蹴りを左足で腹部に放ち、その勢いで逆手構えに構えたブレイガンで斬りかかる。その連撃でローキックを左足で放ち、ブレイガンで横切りからゼロ距離射撃を行う。
　俺は喧嘩慣れ処か、動き慣れしてないヒキニートのはずなのに、ここまで戦えるようになるのはカイザのパワーの恩恵か？それか奴が弱すぎるからか？
「痛い……痛い」
「痛い？何言ってんだ？今まで殺してきたんだろ？ロッチー君」
「何で僕のアカ名を⁉」
　俺は数カ月前に見たことがあった……
　ネットの一部で話題だった動画「ロリショタ殺ってみた」を視聴し、スレッドの最前線で真実かどうかを討論しあっていた。だが、現実味のない殺害方法と犯人だったため作り物と俺達は判断した。だが、オルフェノクだったなら話は別だ。しかも今、目撃したからな。
「何でお前の動画消えなかったのか不思議だよ。５人の子供殺した動画が何で通報されないのか。それはＳＭＡＲＴ　ＢＲＡＩＮの援助か？」
「何でそれまで⁉」
　鎌をかけたつもりだったが……図星だったようだな。もうちょっと話を聞けないだろうか。
「答えろ。ＳＭＡＲＴ　ＢＲＡＩＮについてと、何を協力された？」
「……言えない…殺される」

「……そうか。なら」

「そこで死ねェェェ？」ガシン

何も話さなかった役立たずを力一杯切り上げ、目の前の電柱に叩きつける。

ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ

「これで終わりだ。」

「待って？待ってくださ…ぐへっ？」

「「何だ⁉」」

ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅしたブレイガンのコッキングレバーを引き、動きを止めようとした瞬間のことだった。

立ち上がったオルフェノクの体に、赤い光の三角錐が突き刺さり、それに向かって何かが高速でオルフェノクに突っ込んでいった。

「うぎゃあぁぁぁ？……」Φ

「いったい……これはどうゆうことだ。」

オルフェノクの体からはΦの文字が浮かび上がり、青白い炎と共に体が灰に変わった。その背後で、赤い光を放つアーマースーツを着た奴がふてぶてしく立っていた。

その姿はとても……酷似していた……

「もう一つの……カイザ……⁉」

# 呼び出された17日

そのスーツはカイザと見た目が酷似していた。ベルトの形状、フォトンストリーム、胸部の装甲、それにあの必殺技。
てことはこいつもオルフェノクで、あの変態を葬ったってことは俺と同じような理由で戦っているか、もしくは口封じか。どっちにしろ敵ではないことを祈ろう。
「あんたは何も「大丈夫か⁉シンタロー君？」えっ？あっ？」
キラの急な乱入に気を取られ、その隙にライダーはマンションの屋上に飛び移り、素性も聞けぬまま逃げられてしまった。
「いらねぇことしてんじゃねぇよ？逃げられただろうが？」
「そんなことより、体は大丈夫なの？」
「だから大丈夫だって言ってんだろ」
しつこく安否確認をするキラに、そろそろ煩わしくなってきていたので、証拠として、バックルから取り外したカイザフォンを開き、通話終了ボタンを入力し変身解除して見せた。
するとキラは、全く信じられないというような表情をしていた。
「……菅山君以外に使える人がいるなんて…」
「おい、今何て？」
菅山？何故その名前がこいつの口から出てくるんだ？それにしてもこいつには引っかかる点が多い。この場所について無知なこと、あきらかに素人技では不可能な機材の扱い。カイザギアの致死性についての知識、そして菅山との関係性。これらを重ね合わせると、一つキラの正体が浮かび上がる。
「……それを何処で手にいれたんだ？」
「これは菅山の物じゃない」
「……何を知っているかは知らないが、話を聞かせ「ヒヨリ？しっかりしろ？」」
背後から狼狽する子供の声が聞こえ振り向くと、さっき助けたガキ

の一人が気を失っていた。きっと、さっきのオルフェノクの死に様を見たせいだろう。もしくは首を閉められたのが原因か。それなら早く病院に連れていかないと手遅れになる。
「まずは救急車を呼ぼう。話はそれからだ」
「あぁそうしよう。ってスマホ電池切れてるし、まぁこいつがあるか」
電池が切れているスマホの代わりにカイザフォンから、俺は救急車を呼んだ（かなり噛みまくってだが）。エネがやけに静かだったのはスマホの電池が原因だったのか。後で何言われるかわからない……何をネタに脅されるか考えただけでも吐きそうだ。頼むからデスクトップの左斜め下の二つ目のフォルダーだけはやめてくれよ……
「君も見てもらった方がいい。顔が青いよ」
「いや、これは問題ない（問題ないわけがない）」
しばらくして救急車がこちらに向かってきた。その時、救急隊員は困惑したような濁った瞳で俺達を見ていた。無理もないだろう、小学生二人の近くにコスプレをした巨漢と、あからさまに実用的じゃないベルトを巻いた目付きの悪いジャージ男がいるんだから。それもあってか、キラが非常に綺麗に見える。
糞？このイケメンが……
倒れたガキを救急車に運び終わった後、俺達も付き添いで救急車に乗ることになった。だけど、救急隊員の俺達二人を見る目は変わらない。正直、キラが憎らしいとまで思えてきた。何でここまでイケメンなんだよ……神様ってのは本当に不公平だ。いっそ、カイザギアのアタッシュケースで顔が変わるまで殴ってやろうか。
「どうしたの？」
「いっ？いや？……何でもない」
キラや救急隊員の冷たい目線も気にしていたが、一番心残りなのはあのライダーだ。いったいあれは何なんだ？あの体格からすると中身は女か？フォトンストリームの色の違いもあるし、カイザとは別物なのかもしれん。
いったい何者なんだ……あいつ

シンタローsideout

# 呼び出された17日

呼び出された17日
キドside
今日は外に出れば即座にミイラと化すかもしれない程の晴天。その天候ゆえか、俺達はアジトから一歩も出ずに遊び呆けていた。こんなものじゃ。外でバイトをしているセトに申し訳がつかない。何かしようと考えても、大して収穫はない。ただ時間とカロリーを消費しただけだった。昨日の遊園地の記憶の空白部を思い出そうとしても、脳裏の片隅にすら無くなっていた。
「ドロー4?」
「私もドロー4?」
「合計8枚……今は……32枚…」
意外だった。ユサがこんなにUNOが弱いなんて、これをいれると七回連続で最下位だ。まさかわざとじゃないのか?そうでなければ、こんな大差で連続で負けるなんて業はできるはずがない。
「ユサさん弱すぎじゃないですか~」
「カードが悪いんだよ。きっとそうだ」
「それはカードじゃなくて、お前が弱いんだ」
「こんなに負けてる人……くっ?始めて見た」
「お前も言えた口じゃないだろ?負け犬」
さっきまで笑っていたカノは、俺の罵倒がクリティカルしたのか、机に突っ伏した。
「上がりだ」
「私も上がり?」
「私も」
「マリーはともかく、お前ら弱すぎないか?」
「うるさいな?僕はあんまりこういう……ねぇ、今ニュースで何かやってなかった?」
顔を真っ赤にしてムキになっていたカノの表情は、テレビのワイドショーを見た瞬間に元の青白い表情に戻っていた。

ニュースで紹介されている監視カメラの写真には、ぼやけていて分かりにくいが、赤い光を放つ黒い人影が写っている
「これどっかで……」
「でも何か違うよね」
「もっとダークと言うか……不気味な感じだったような……」
ら
だいたい想像している物は一緒なようだ。この写真に写っている人影はそれに類似点が多い。それにしても、「この世でさ迷い続けている怨霊」って安直すぎやしないか？見ようによっては見えるが、もう少し捻りと言うか、オリジナリティーは無いのだろうか。
出演している胡散臭い霊能師の話を聞かされる、アナウンサーの気持ちを考えると耳鳴りがしそうだ
「なら探してみようか」
「えっ？何をですか？」
「だからこれを。発見されたのはこの辺りだから見つかるかもしれないよ。それとこいつは５５５（ファイズ）かもしれない。」
「「５５５？」」
「スマートブレインが開発したライダーシステムの一つ。言うならカイザを更に改良して作られたんだよ。その写真と５５５との類似点が多い、だから探す価値はあるよ」
「ならお兄ちゃんにも連絡しない　と……って繋がらない。何してるの？お兄ちゃん」
不満を口にしながら、スマホを弄るモモを見て、ふと、俺も携帯を取り出した。
確かあの時、カイザフォンの電話番号を登録しておいたはずだ。これなら出るかもしれない。
……
もしもし
「シンタローか？今何処に？」

如月総合病院だ。
「病院？精神科か？」
お前……
「悪い……で？何故病院に？」
はぁ……オルフェノクに襲われたガキを病院に連れていってたんだよ
「オルフェノク？倒したのか？」
倒した……いや、先に倒された
「倒された？」
何かカイザに似てるんだが……少し違う姿をした奴に先を超された
「…それって……そいつは赤い光を放っていたか？」
何で知ってるんだ？その事
「何だと……場所は……」
何だ⁉
「えっ？何があったんだ？シンタロー？」
ヤバイヤバイ……おっおお……オルフェノクが出りゃ……出た？ののっのんきに喋ってる暇じゃねぇ？じゃあ切る
「おい？シンタロー⁉」
切られたか……あの焦り様から察すると、かなり危険な状態のようだ。……今、向かうのは邪魔になるか。
「どうする……」
「これを貸してあげる」
ユサは鞄から、ＳＦ映画等で異星人と戦うために造られたプラズマガンのような風格を持った、大振りの真っ黒なハンドガンを取り出した。
「何だ？これは？」
「高濃度フォトンブラッド圧縮照射兵器「スティング」。こいつなら、並のオルフェノク程度なら倒せる。弾は１０発で自動リロードだけど、五秒かかるから気を付けて」
「すまない……」

俺はユサから借りたホルスターケースを腰に装着し、スティングを差し込む。
「僕は彼女達と残っているよ。誰か戦える奴がいないと危険だからね。だけど、無茶だけは駄目だよ」
「何から何まですまない。行くぞカノ」
「わかった。二人を頼んだよ、ユサ君」
「私も行きま「駄目だよ」でも?」
「君が行ったら、余計にシンタロー君の邪魔になる。ここは信じてまってあげよう」
「……はい」
ユサがモモを宥めている間に、俺達は足早に如月総合病院に向かった。この銃を使いこなせるかは分からないが、シンタローの負荷を減らすことはできるはずだ。

待っていてくれ……シンタロー
キドｓｉｄｅｏｕｔ

# 呼び出された17日

シンタローｓｉｄｅ

倒れた女の子の付き添いとして、俺達は救急車に乗ることになった。それが災いとして、モモが通っている神無月高校近くの如月総合病院に着いた途端に、俺は近くの階段でマーライオンと化した。

何を隠そう俺の嘔吐中枢は、凄まじく敏感なのだ。救急車の運転はいたって普通だったが、少しの揺れだけでも、俺の三半規管を襲撃するには十分すぎる物だった。

きっと三日分の胃の内容物を吐いたかもしれないぐらい、嘔吐の勢いは凄まじい物であった。

それだけ吐いている奴を見て、心配しない奴はいないであろう。居たとしたら、それはよほどの薄情者かモモしかいない。

つまり、何が言いたいかと言うと……

俺も診察される羽目になった

女の子の方は、ただ、ショックでぶっ倒れただけで、命に別状はなく、入院の必要もなかった。

俺もただの乗り物酔いだったため、酔い止めの薬を貰うだけで済んだ……そのついでに口の洗浄剤まで渡された。

「あの医者……完全に汚い物を見る目だった……」

「まぁ気にしちゃ駄目だよ」

「いっそ…カイザギアを使ってこの病院を……」

「それは駄目だ？絶対に？」

「冗談だから体を揺さぶるな……また出る……うっ」

「ご…ごめん」

酔い止めが効いているとしても、未だに脳がアイスシェイクのようにかき混ぜられた気分が残っているから、頭が揺れるだけで吐きそうだ。

「そう言えば、何故菅山のことを知っている？」
「君こそ何で……それよりも、菅山君は何処に行ったんだ？」
俺は菅山と初めて出会った時と、菅山の最後について、洗いざらいキラに話した。話を聞いたキラは菅山の死よりも、オルフェノクを惨たらしく殺したことに顔を歪ませていた
「彼……結局…復讐したんだね」
「復讐？」
そういえば、あいつ選べなかったって言っていたな。それについて、キラにも仄めかしていたのか。菅山は関わっても、ろくな奴じゃなかったみたいだな
「……僕はこの世界……いや、この時間の人間じゃない」
「は？いや、ふざけるところじゃないぞ？ここ」
「ふざけてない。これが証拠さ」
キラはジャケットの胸ポケットから学生証らしき手帳を取り出す。見た瞬間に俺は、自分の中の固定観念と常識と戦わなくてはいけなかった。

……キラ　ヤマト……
……C．E．55年　5月18日
「なぁ……C．E．って……」
「コズミック　イラ。僕の時間の紀元のことだよ」
「……と…とりあえず、信用することは後にする。だから、何があったんだ？」
「僕は信用されてないのか……まぁ良いよ。気がつけば、この時間の世界の公園にいたんだ」
俺の時間の世界とやらは、よほど、公園に縁があるみたいだな。俺も一度死んでオルフェノクになったし、初めてカイザに変身して戦ったのもあの公園だった。そしてキラと会ったのも彼処だ。
実は、誰かが仕組んだ物で、今まで起きたことはその誰かのシナリオ通りなのかもしれないのか？
「何もわからなかった僕の前に現れたのが、カイザに変身していた菅

山君と絢瀬さんだった」
「ちょっと待て、もう一人居たのか？それに女か？」
「うん。両方とも綺麗だったよ。自然な金髪で、絢瀬さんは綺麗な蒼い眼をしてた。しかも、良い人達だったよ」
　確かに菅山を初めて見た時、見惚れるほどの美形だったな。まるで戦闘アニメの主人公が、画面から出てきたように思えるほどの物だ。だから、その絢瀬って言う奴もさぞや綺麗なんだろう。
「そんなに綺麗なら会ってみたかったな。その娘に」
「ちなみに菅山君の彼女だよ。手を出そうものなら、菅山君に殺されちゃうよ……」
　その事を話すキラの笑顔は、トラウマを思い出したような引きつったものだった。他にも免罪で死刑執行されかけた哀れな容疑者のようにも見える
　あいつ……ヤンデレ属性あったのかよ。しかも、カイザの資格者なら尚更怖い。と言うか、男のヤンデレほど背筋を凍らせる物は無い
「なんておっかない奴だ……」
「それにもう無理だよ……殺されちゃったから」
「それは……何となく理解してる……それは誰にだ？」
「君が言った、菅山君に殺されたオルフェノクにだよ。心臓を一突きにされて灰に変えられた」
「……オルフェノクってのはクズしか居ないのか…」
　俺自身を含めて、オルフェノクってのはろくな奴が居ないな。間接的にも直接的にも、人に迷惑をかけている。
「…それから……菅山君はおかしくなって、オルフェノクを無差別に殺し始めた。何の罪も無いオルフェノクまでね」
「待て、何の罪も無いオルフェノクなんて居るのか？あんな社会に不必要な化け物共」
「言葉ぐらい選んだらどうだ⁉なりたくてなった訳じゃないオルフェノクだっているんだ？彼は人間でいようとする人達まで殺したんだ……」

確かに言葉ぐらい選ぶべきだった……オルフェノクとは言え、元々は人間だ。オルフェノクになっても人間を辞めるつもりが無い奴がいるかもしれない。だが、あの蟷螂と蛙野郎のような、人間捨てた奴もいる。いつ人間を捨てるかもわからない化け物を野放しにしないのは正しいのかもしれない。殺しに対しては肯定できないが、キラの意見を全部肯定することもできない。

「菅山のやったことは最悪だ。だが、あの蟷螂野郎みたいな奴はこれからも増える。それに好きな女の子を殺されたのなら仕方ないだろう」

「……き…君は殺しを肯定するのか？……菅山君のように」

「肯定はしない。無意味な殺しはクズのやることだ。だけど、好きな女の子を殺されたり、目の前でクズが愚行を働く中で銃口を向けられない奴は「偽善者」だ」

「……くっ」

「えっ⁉すっすす…すまん？泣かしぇる……泣かせるつもりはなかち？……無かったんだ？」

「菅山君にも言われたよ。そして考えを今まで改めなかった。僕は偽善者なのか……」

キラの目には涙が溢れ出していて、自己嫌悪の渦に飲まれていた。コミュ障だからか、喋ることができる相手に対しては何の配慮もできない。その点キラは良い奴すぎる、普通ここまで考え込まない…殺しに対して嫌悪感を抱くのは普通の感情だ。俺達は軍人じゃない。だからこそ、キラをクズ呼ばわりした自分が嫌味ったらしく見えてくる。

「……悪かった？調子に乗って？」

「いや、良いんだ……全員を救うことはできないってことがようやくわかった……」

「でも…お前の優しさは必要だ…だから失うな（小声）」

「…凄く下からだね。」

「す…すまん」

「別に良いよ。それと、言いたいことがまだあるんだ」

「……おう。手短に頼む」

諸事情によりまだ途中です

キラは涙をハンカチで拭くと、またノートパソコンを鞄から取り出し、開いた画面をこちらに見せる。その画面には、カイザギアのような異形な形をしたベルトが写っていた。ベルトの画質は悪いけど、明確にカイザギアとの相違点が確認できる。

ベルトは左右でデザインが別の物で、ツールも右側に拳銃のような物がついているだけで、お世辞にも使いやすそうとは言えない。

それにバックル部分は、携帯型のトランスジェネレーターが付属しておらず、バックル自体がその役割を果たしているように見える。

「これは……？」

「菅山君の調査記録の断片さ。これには何か……精神に作用するものがあるらしい」

「精神に作用するもの？」

「そこまではわからない。ただ、君なら扱えるかもしれない」

「はっ？」

扱えるも何も……オルフェノクの俺なら扱えるかもしれない。だけど、わけのわからない精神に作用するものがあるベルトを「はい、そうですか。変身？」って具合に使えるはず無いだろう。

「カイザに適合できたのなら、これも使いこなせるんじゃ……と思っただけさ」

「でも適合できたってことは……君もオルフェノクなのか？」

流石に隠しきれないか。目の前でカイザに変身したんだ、それに体は何の異常もない。菅山と居たなら、ベルトがオルフェノクにしか使えないことぐらいは知っている。いや、現に止めに入った時点で知っているだろう。

「あぁ…鉄骨の下敷きになってな……」

「……ごめん」

「謝るくらいなら最初から聞くなよ。それに俺も菅山と同じで人を襲

うつもりは無い」
「……それはわかるよ。君からは殺意や狂気は感じない。それに、彼らのようにベルトを悪用する気は無いようだしね」
パソコンを閉じたキラは、嫌な過去を思い出しているのか、虚ろな表情で、向かいの窓に写る景色を見つめていた。
「彼ら？」
「菅山君とは別の時間……いや、菅山君達は別の世界から来たと言った方が良いな」
「世界自体が違うわけか。お前は遥か未来の俺達の世界から来たわけだな」
「ほぼ正解だ。菅山君と絢瀬さん以外にも二人いたんだ。彼らは体にオルフェノクの記号があった。二人は好戦的な性格でね。菅山君とは喧嘩が絶えなかった。挙げ句の果てには、カイザギアを盗んで変身したんだ」
先程の虚ろな表情から一変して、苦渋に満ちた表情でその二人について話していた。よほどうんざりするようなことをしでかしたんだな。
「何て奴らだ……記号ってのは、ベルトにオルフェノクって誤認させる物なのか？」
「そうらしい。向こうの世界で実験台にされたと言っていたよ。でも、彼らの記号は微弱だった。変身してオルフェノク狩りを口実に、人を殺し始めたけど、5分で体が灰になった。もう一人は変身する前にオルフェノクになった菅山君に首を飛ばされた。」
「そんなことが……」
「だから、ベルトはちゃんと管理して「あっすまん」」ジリリリーン？
キラの話の腰を折ったのは、一本の着信だった。カイザフォンの着メロはメロディーというよりは目覚まし時計だった。どうやら電話の主はキドらしい。あいつの電話番号がカイザフォンに表示されている
「もしもし」

シンタローか？今何処に？
「如月総合病院だ」
病院？精神科か？
「お前……」
悪い……で？何故病院に
「はぁ……オルフェノクに襲われたガキを病院に連れていってたんだよ」